愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第 15 号
2014-3
63-74p

愛知県における中世瓦の展開とその特徴

永井邦仁

現在の愛知県に相当する尾張・三河国域で出土する中世瓦、特に 13 世紀代の展開を概観する。個別資料の編年的位置を確認しながら、神宮寺と天台宗山林寺院を基軸とする分布に着目し、尾張の熱田大宮司家とそれを継承した三河の足利氏による寺院造営活動の一端を示しているものと考えた。

はじめに

旧尾張・三河国からなる愛知県域では、7 ～ 8 世紀に古代寺院が多数建立され、そこでは重厚な古代瓦が用いられ、次いで古代末から中世初頭と呼ばれる 11 ～ 12 世紀には、尾張の知多地域を中心に山茶碗との兼業窯で焼かれた、古代瓦より小振りな瓦が京都の離宮や寺院へと供給された。そして 16 世紀末の織豊期城郭を端緒とする江戸時代には、燻しで黒光りする近世瓦が名古屋をはじめとする城下町の屋根を飾った。さらに江戸時代も後半になると、西三河南部で生産された瓦が江戸を始めとする大都市圏へと流通し、定着した「三州瓦」ブランドは近代から現代へと続いている。

このように愛知県における瓦の歴史を手短に表現しようとしたときに、13 ～ 16 世紀のいわゆる中世の瓦について特に記述がなく、一見空白期間のような印象を受けるのではあるまいか。しかし実際に尾張・三河の中世寺院（跡）では、中世瓦の出土が以前より知られており、その数は決して少なくない。もっともこれら中世寺院（跡）は山上に所在することが多く発掘調査の対象にあまりならないために、私たちが中世瓦にふれる機会は少ない。

筆者はこれまでに、自治体史の編纂に関わって中世瓦のいくつかを調査し個別に資料提示してきたが、それら相互の関係や考古遺物としての年代的な検討をすることなく過ごしてきた。しかしそれでは瓦の出土する遺跡を真摯に評価したことにはならない。そこで、地域における中世瓦の展開を追跡することで、それと歴史的事象との対比を試みる。

南都における中世軒平瓦の編年

中世瓦の分布は、日本列島におけるいくつかの政治的・宗教的拠点を中心にみることができる。すなわち幕府の置かれた鎌倉・京と大寺社が集中した南都である。特に京と南都では、寺社の修理・再建などを通じて古代からほぼ連続して瓦生産・使用が継続していた。また個々の経緯について文献史料に残されていることも多く、瓦の製作・使用年代がかなり限定できる点で、編年研究にとってひじょうに有利である。

とりわけ南都では法隆寺・興福寺・東大寺における軒平瓦編年が基礎となっている。法隆寺の瓦を整理した佐川正敏氏は、瓦当部製作技法の変化、すなわち顎貼り付け技法から瓦当貼付け技法への推移が 1260 年代を軸に起きていることを示した（佐川 1995）。佐川氏の研究は山崎信二氏によって、その全国的な検討を経たうえでより有効性が確かめられている（山崎 2001）。一方、興福寺の中世瓦を整理した芦田

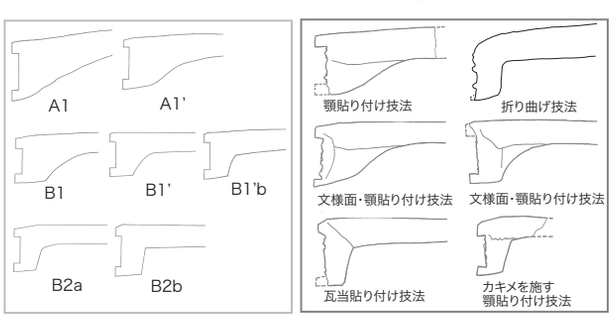

図 1　軒平瓦顎部形態と製作技法の分類（芦田 2002 を改変）

淳一氏は、上記の変遷に加えて 13 世紀前葉～中葉で限定的にみられる文様面・顎貼り付け技法と、顎部形態の変化をみることでより詳細な編年が可能であることを示した（芦田 2001・2002）。これらの編年研究は、前者は全国的な傾向として認められるが、全期を通じて顎貼り付け技法が継続する和泉国域のような例外も提示され（山崎 2001）、後者では、細かな変化がそのまま南都以外に見出せるのか、地域ごとの検討がまだ着手されていない状況にある。

12 世紀代の尾張産瓦

本稿は、13 世紀以降を中心に愛知県内の中世瓦集成を目的とするが、これに先立つ 12 世紀中葉～後葉にピークとなる尾張地域における京都向け瓦生産は、直接的な起点として重要である。当該期の瓦生産については、1950 ～ 60 年代に社山古窯や権現山古窯を発掘調査した杉崎章氏や久永春男氏によって、尾張地域の中世瓦概観やその年代及び歴史的背景への言及がなされている（白菊古文化研究所 1965）。そして 1970 年代以降では、各窯出土資料を検討した柴垣勇夫氏（柴垣 2003）や上原真人氏（上原 1978）、近年では梶原義実氏（梶原 2008）による研究がある。概括すると、1130 年代の京都における鳥羽離宮造営などへの供給を契機とする山茶碗窯での瓦生産は、東山地区・知多半島基部で開始されそこから半島各地へと拡大し、やがて収束するというものである。

特に柴垣氏の研究により京都出土瓦との同笵・同文関係が整理され、その需給関係と生産窯の年代観があきらかにされた点は意義深く、軒瓦の瓦当部製作技法の変化に注目している点も重要である。それによると、Ⅰ期（12 世紀中葉）の軒平瓦では、笵詰め中の瓦当部に平瓦を接合する方法があり、その後半段階から折り曲げ技法が導入される。そしてⅡ期前半（12 世紀後葉）以降に平瓦凹面の布目が瓦当面まで連続する「完成された」折り曲げ技法が定着するというものである。なおⅠ期から継続する笵詰め瓦当部への平瓦接合は、平瓦端部が瓦当上

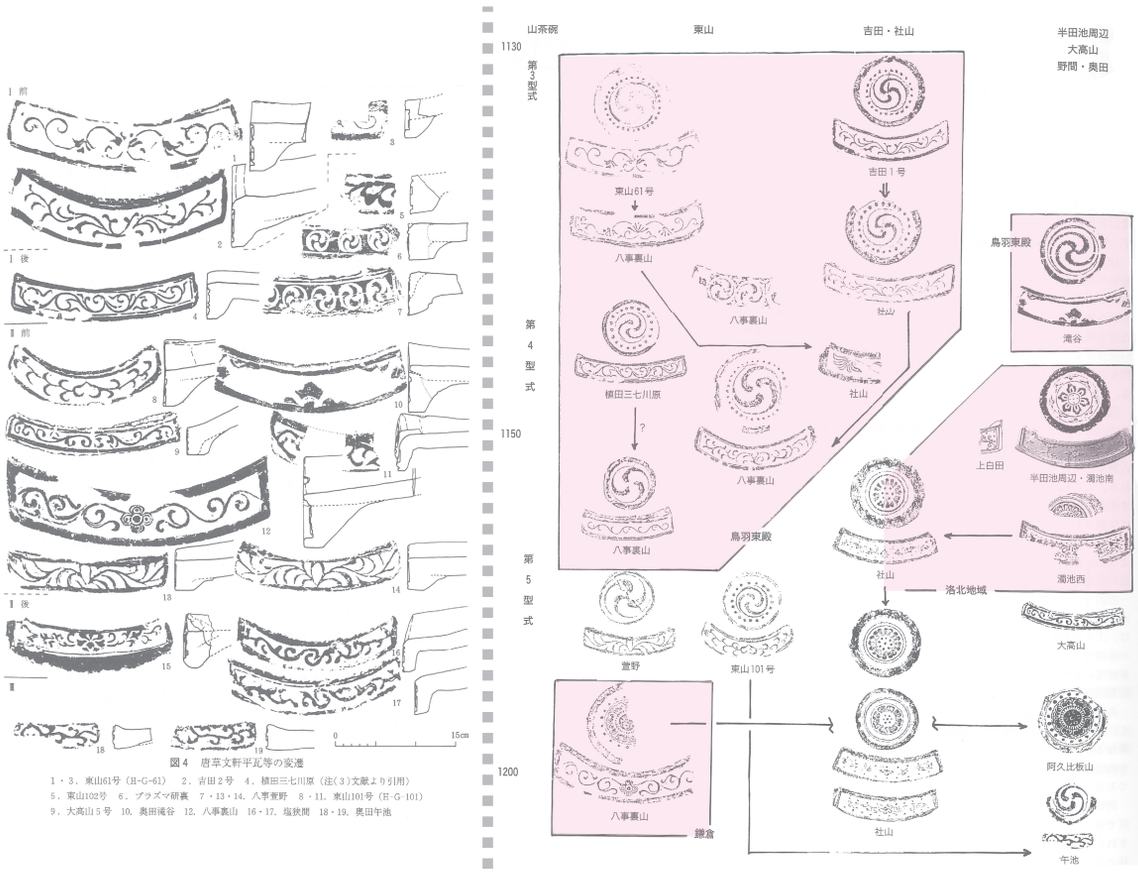

図２　12 世紀代の尾張産瓦とその供給先（左：柴垣 2003 から転載、右：梶原 2008 からトーン付加して転載）

端となる接合方法へ推移するとされるが、筆者によればこれは２つに分けることができる。すなわち１つは顎貼り付け技法に相当し、例えば八事裏山古窯群の瑞花唐草文軒平瓦（図２左引用図の 12）がある。２つ目は滝谷古窯の半截花文軒平瓦でみられるもので（図２左引用図の 10）、笵詰中瓦当部の平瓦接合面が斜めとなるように指頭でナデつけたものに平瓦を接合し、補強粘土を顎部裏面に付加している。このタイプは、前節の瓦当貼り付け技法に類似する断面をしているが平瓦端面を加工していない点で全く別の技法であるといえる。次いでⅢ期（13 世紀）は、折り曲げ技法がなくなり瓦当文様や製作技法の粗略化が進むと説明される。

このように 12 世紀代の尾張産瓦をめぐる研究は、京都向け生産を主軸とすることで 13 世紀以降を衰退期もしくは一定の終焉として描くこととなる。ただしこれは、13 世紀初頭前後の地域外での瓦需要減少を画期として、山茶碗窯を拠点としていた瓦工人の激減を示したものであって、当該地域における瓦生産と使用そのものが消滅したわけではない。むしろ 12 世紀中葉から少しずつみられた地元での瓦需要は、一定品質の瓦を求めてさまざまな動きをみせることとなるのである。

尾張の中世瓦とその年代

そこで県内の中世瓦を集成しつつ（図 3･5･6、表 1・2）、南都の軒平瓦編年研究の成果を参照してその年代観を絞り込んできたい。

まず尾張では、12 世紀代にさかのぼるものとして、同笵とみられる名古屋城三の丸遺跡（20）と高蔵遺跡（24･25）の唐草文軒平瓦や、熱田 B 遺跡の軒平瓦（38 ～ 40）、熱田神宮の半截花文軒平瓦（29）、そして熱田神宮と東海市で出土する杏葉唐草文軒平瓦（42・48）が挙げられる。 杏葉唐草文軒平瓦 （48）は補強

表 1　尾張の中世瓦一覧（ただし瓦生産窯を除く）

遺跡名	遺跡種別	所在地	遺物種別	文献・出典	所蔵
真清田神社（尾張一宮）	神宮寺？	一宮市	【軒丸瓦】三巴文2種（拓本のみ）	名古屋市博物館1992	-
下津宿遺跡	寺院・居館？	稲沢市	【軒丸瓦】1,2:三巴文、5,6:棟込瓦、7とセット【軒平瓦】3:連珠文、瓦当貼り付け技法。4:唐草文、顎貼り付け技法？7:変形連珠文	1～7 :愛知県埋蔵文化財センター2013	愛知県埋蔵文化財調査センター
日置本郷B遺跡	集落（平安時代～、日置八幡宮に近接）	愛西市	【軒丸瓦】8:三巴文【軒平瓦】9,10:唐草文、瓦当貼り付け技法、燻し。11は三重県亀山市正法寺山荘の唐草文と同一意匠。	8～10 :愛知県埋蔵文化財センター2012	愛知県埋蔵文化財調査センター
音楽寺跡	平地寺院（古代～）	江南市	【軒丸瓦】三巴文（資料中に1点確認）	-	江南市歴史民俗資料館
大縣神社（尾張二宮）	神宮寺？	犬山市	【軒丸瓦】複弁蓮華文（拓本のみ）、角池遺跡・愛知県庁と同笵？	名古屋市博物館1992	
角池遺跡（勝部廃寺）	寺院	犬山市	【軒丸瓦】11,複弁蓮華文	11 :愛知県史編さん委員会2010	犬山市教育委員会
大山廃寺	山林寺院（古代～）	小牧市	いずれも若干数【軒丸瓦】12:変形蓮華文、13:三巴文【軒平瓦】14:連珠文、12に焼成近い。15:唐草文で中世後半、凹面に刻書「木」？。16:唐草文、燻しある近世瓦に近い。17:連珠文、瓦当貼り付け技法。18:連珠文、顎貼り付け技法。	小牧市教委1979	小牧市教育委員会
白山中世遺跡	不明	春日井市	【軒平瓦】連珠文、珠文密で郭線なし（写真のみ、現物不明）	春日井市教育委員会1971	春日井市教育委員会
愛知県庁（旧外堀町）	平地寺院？	名古屋市中区	【軒丸瓦】19:複弁蓮華文、角池遺跡・大縣神社と同笵？、燻しなく陶器質な焼成	-	名古屋市博物館
名古屋城三の丸遺跡（旧国立名古屋病院地点）	平地寺院？	名古屋市中区	【軒平瓦】20:唐草文、文様表出悪い、高蔵遺跡（24・25）と同笵？赤褐色で陶器質焼成。	20 :愛知県埋蔵文化財センター2005	愛知県埋蔵文化財調査センター
高蔵遺跡	集落・寺院（区画溝）	名古屋市熱田区	【軒丸瓦】21:三巴文【軒平瓦】22,23:連珠文、郭線なし、燻しなし灰色、顎貼り付け技法。24,25:唐草文、燻しなし赤褐色の陶器質。萱野古窯の唐草文と凹凸反転か。名古屋城三の丸(20)と同笵？丸・平瓦多数出土。	21・22(拓本) :荒木集成館1987・1991・名古屋市教育委員会1988	荒木集成館(21-23)、名古屋市教育委員会(24-25)
熱田神宮内遺跡	寺院（神宮寺？）	名古屋市熱田区	【軒丸瓦】蓮華文、社山窯産、26,27:三巴文各種、拓本資料もあり【軒平瓦】28,29:半截花文、30～32:連珠文、顎貼り付け技法、燻し無く灰色。唐草文（拓本のみ）。杏葉唐草文。	名古屋市教育委員会1989、29 :梶山1989、半田市博物館1993、26～28 :(株)イビソク2009	名古屋市教育委員会(30-32)、熱田神宮神宝館、名古屋市博物館(29)
熱田C遺跡	集落・寺院	名古屋市熱田区	【軒丸瓦】33:三巴文、甘い燻し【軒平瓦】34:連珠文、瓦当貼り付け技法、燻し飛ぶ？黄褐色。【鬼瓦】中世後半？	33・34 :(株)二友組2013	名古屋市教育委員会
熱田B遺跡	集落・寺院	名古屋市熱田区	【軒丸瓦】35～37:三巴文各種、36のみ甘い燻し【軒平瓦】38:唐草文。39:唐草文。凹面に笵押し付け時の横ジワ。40:下向陰刻剣頭文。【鬼瓦】41:燻しなし	35 :名古屋市教育委員会2006	名古屋市教育委員会
瑞穂遺跡	居館？（区画溝）	名古屋市瑞穂区	【丸・平瓦】区画溝から出土。	名古屋市史編さん委員会2013	名古屋市教育委員会
大喜遺跡	集落	名古屋市瑞穂区	【平瓦】	名古屋市教育委員会1989	名古屋市教育委員会
光正寺遺跡	貝塚・寺院	名古屋市緑区	【軒丸瓦】49:蓮華文、円形の平面的な花弁（拓本・写真のみ）	森達也	-
観福寺	平地寺院（中世～）	東海市	【軒平瓦】42:杏葉唐草文、社山窯産、丁寧な陶器質、東畑遺跡(49)と同笵。	42 :白菊古文化研究所1965、半田市博物館1993	-
畑間・東畑・郷中遺跡	集落・平地寺院（中世）	東海市	【軒丸瓦】43:三巴文(笵A)、無釉。44:三巴文(笵B)、瓦当に釉。45:三巴文、棟込用【軒平瓦】46,47:連珠文、瓦当貼り付け技法、燻し飛ぶ？45とセットになる棟込用。48:杏葉唐草文、社山窯産、観福寺と同笵。	43～47 :東海市教育委員会2012	東海市教育委員会
大御堂寺	平地寺院（中世～）	知多郡美浜町	【軒丸瓦】50:三巴文【軒平瓦】51:連珠文。52:半截花文、西平井古窯産。	50～52 :美浜町誌編纂委員会1985、半田市博物館1993	野間大坊
医王寺古堂	山林寺院（中世～）	知多郡南知多町	【鬼瓦】	半田市立博物館1993	利生院

図 3　尾張地域の中世瓦拓本・実測図（断面トーンあるものが永井実測資料）

粘土の多い顎貼り付け技法である。それ以外では、38 でみられる斜めの接合痕が柴垣氏のⅡ期前半における製作技法と判ずるならば、いずれも 12 世紀代中・後葉で占められることになる。熱田神宮では文献史料で承和年間（834 ～ 848 年）に神宮寺の存在が確認され、実際に参拝者休憩所地点の発掘調査では当該期の須恵器・灰釉陶器も多数出土している。また神楽殿地点での発掘調査では奈良時代後半にさかのぼりうる平瓦も出土しているので、当該期から瓦葺き建物が継続していたとみられる。さらに神宮境内では発掘調査以外にも瓦が採集され（27 ～ 29）、瓦礫舎（図 4）や柴田常恵氏による拓本からも多様な軒瓦の存在を知ることができる。高蔵遺跡や熱田 B 遺跡はその周辺に位置し、それらも含めると熱田には東山地区と知多半島の各地区から偏りなく瓦が供給されていたことになり、瓦の集散地的様相がうかがえる。

その熱田神宮内遺跡からは、典型的な顎貼り付け技法の連珠文軒平瓦（30 ～ 32）が参拝者休憩所地点の発掘調査で出土している。おそらく神宮寺に使用されたものであろう。顎部下幅は約 3.5cm で平瓦接合面も比較的長く、共伴する丸・平瓦にも燻しはない。同様に高蔵遺跡の連珠文軒平瓦（23）も顎部が大きい。これらの諸特徴は、南都の編年では 12 世紀末～ 13 世紀初頭である。ただし同文資料（22）では顎部がやや小型化しており、23 から 22 への推移が想定される。また、大御堂寺の連珠文軒平瓦（51）は詳細不明ながら顎部形状は芦田 B1’ 類に相当し、大山廃寺の連珠文軒平瓦（18）は顎貼り付け技法ながらシャープな顎部形態（芦田 B1’ b 類）である。時期は前者で 13 世紀前葉、後者は 13 世紀中葉となろう。

図 4 『古瓦譜』の熱田神宮瓦拓本（名古屋市博物館 1992）

次に、下津宿遺跡 (3) や日置本郷 B 遺跡（9・10）、大山廃寺跡（17）、熱田 C 遺跡（34）、畑間・東畑・郷中遺跡（44）で瓦当貼り付け技法がみられる。いずれも顎部下幅は 2.0cm 前後で顎部形態が芦田 B1’ b ～ B2 類に相当する。3 は珠文が輪郭のみに退化し、17・34・44 も小粒な珠文であることから、同じ連珠文の中でも後出的である。また下津宿遺跡は、尾張国守護所に関係して 14 ～ 15 世紀が最盛期、日置本郷 B 遺跡では出土した区画溝（09A 区 035・041SD）が中世後半（14 ～ 15 世紀）に比定されている。したがって、南都の編年における 1260 年代以降という指標からは確実に新しくなるが、共伴遺物である陶磁器が示す年代はその廃棄年代であることから、製作・使用は 14 世紀代を下らないと考えておきたい。

西三河の中世瓦とその年代

西三河地域では、12 世紀末～ 13 世紀初頭とされる塩狭間古窯の軒平瓦が代表格とされていたが、あらためて大門遺跡出土瓦群が 12 世紀代の資料として群を抜いて先行していることを強調しておきたい。軒丸瓦（72）は瓦当面に釉が掛かり尾張・東山地区産を思わせ、同様に唐草文（73）は顎部の形態から 12 世紀中葉前半と考えられるし、陰刻剣頭文（74）は 12 世紀中～後葉の尾張産瓦に比して遜色がない。一方、瓦当面に布目痕のある折り曲げ技法の軒平瓦（75）および同文の可能性がある 77・79 は太く彫りの深い唐草文で、近似する文様が別郷廃寺（89）と、製作技法は異なるが大草山廃寺（浄土寺）（92 ～ 94）にある。

顎貼り付け技法は高隆寺の連珠文軒平瓦（70）に典型例をみる。顎部下幅約 3.0cm と大きな珠文が特徴で、熱田神宮内遺跡の連珠文軒平瓦（30 ～ 32）に近い。同様の規模で注目さ

表２　三河の中世瓦一覧

遺跡名	遺跡種別	所在地	遺物種別	文献・出典	所蔵
塩狭間１～3号窯跡	窯	豊田市	【軒丸瓦】53:三巴文、石座神社(101)・八剣神社（104）と同笵、硬質焼成灰色【軒平瓦】54:唐草文(文様A）、八剣神社(106,107)と同笵のAaと別笵Abあり。55:唐草文(文様B)、文様Aの踏み返し。【丸・平・熨斗瓦】格子タタキ。	53～55 :足助町教育委員会1983	豊田市教育委員会
宮ノ後遺跡	寺院（足助八幡宮神宮寺）	豊田市	【軒平瓦】連珠文、中世後半？。【丸・平瓦】塩狭間窯産	-	豊田市教育委員会
猿投神社境内	寺院（神宮寺）	豊田市	【軒平瓦】58:連珠文、文様面・顎貼り付け技法。	-	豊田市教育委員会
西ノ宮遺跡	祭祀？	豊田市	【軒平瓦】57:連珠文、瓦当貼り付け技法	三河山寺研究会2010	豊田市教育委員会
矢並下本城跡	山城	豊田市	【丸・平瓦】丸瓦は吊り紐痕あり、共に燻し。	愛知県埋蔵文化財センター2003	豊田市教育委員会
六所神社上宮	祭祀？	豊田市	【軒丸瓦】58:三巴文、珠文なし。	松平町誌編纂委員会1976	豊田市教育委員会
寺部遺跡	集落・寺院？（古代・中世）	豊田市	【軒丸瓦】三巴文、珠文なし。【軒平瓦】連珠文。【塼】燻し。	豊田市教育委員会2014	豊田市教育委員会
古城遺跡	集落・平地寺院（古代・中世）	豊田市	【鳥衾瓦】59:三巴文、燻し飛ぶ？【軒平瓦】60,61:連珠文、文様面・顎貼り付け技法？、燻し飛ぶ？	59～61 :豊田市教育委員会2004	豊田市教育委員会
天神前遺跡	集落	豊田市	【丸・平瓦】凸面に斜格子タタキ	愛知県埋蔵文化財センター2001	豊田市教育委員会
郷上遺跡	集落	豊田市	【丸・平瓦】62:凸面に斜格子タタキ【鬼瓦】小片	62 :愛知県埋蔵文化財センター2002	豊田市教育委員会
長興寺	寺院（中世～、臨済宗）	豊田市	【軒丸瓦】63:三巴文、硬質灰色。65:三巴文、磨き燻しある中世末【軒平瓦】64:瓦当欠損、軟質褐色。66:瓦当貼り付け技法、燻し。他に中心飾のある連珠文など	63～66 :北村・永井2014	豊田市教育委員会(63-66)・名古屋市博物館（小栗鐵次郎採集）
滝山寺	山林寺院（中世～、天台宗）	岡崎市	【軒丸瓦】67:三巴文、【軒平瓦】68:連珠文、文様面・顎貼り付け技法。共に本堂脇の防火用水工事で出土。【丸瓦】筆者採集。	杉浦1999	高浜市やきものの里かわら美術館(67)、岡崎市美術博物館(68)
高隆寺	山林寺院（古代～、天台宗）	岡崎市	【軒丸瓦】69:三巴文、【軒平瓦】70:連珠文、顎貼り付け技法【鬼瓦】中世後半か、実測図あり	69・70 :愛知県史編さん委員会2010	高隆寺
真福寺	山林寺院（古代～、天台宗）	岡崎市	【軒丸瓦】71:三巴文	71 :三河山寺研究会2010	真福寺
大門遺跡	平地寺院？（古代～）	岡崎市	【軒丸瓦】72:三巴文、瓦当に釉の陶器質。76:三巴文【軒平瓦】73:唐草文、陶器質。74:下向陰刻剣頭文、折り曲げ技法、黒褐色。75,77,79:唐草文、折り曲げ技法、瓦当に布目。浄土寺と同一意匠。78: 連珠文	72～75,80 :愛知県史編さん委員会2010、76～79 :愛知県立岩津高等学校郷土史研究部1959	岡崎市美術博物館
矢作川河床遺跡	集落など	岡崎市	【軒平瓦】82:連珠文、顎貼り付け技法？81と共伴。83:連珠文、文様面・顎貼り付け技法【平瓦】燻しなし、黒褐色、凹凸面に焼成前刻書あり	81～83 :岡崎市編集委員会1989	岡崎市美術博物館
八橋古城跡	居館	知立市	【平瓦】燻し	知立市教育委員会2012	知立市教育委員会
知立古城跡	居館？	知立市	【軒丸瓦】三巴文、近世瓦に近い		知立市教育委員会
ジグウジ遺跡	寺院？（知立神社神宮寺）	知立市	【軒平瓦】84:連珠文、文様面・顎貼り付けもしくは瓦当貼り付け技法。85:唐草文、瓦当まで布目痕、折り曲げ技法、燻しなし。86:連巴文。顎貼り付け技法【丸瓦】	永井2007	知立市教育委員会
本證寺	平地寺院（中世～、浄土真宗）	安城市	【軒丸瓦】87:三巴文、珠文なし、燻しなし、黄褐色。【軒平瓦】88:画線のある連珠文、顎貼り付け技法？凸面縦ナデ曲線顕著。87とセット。境内北西隅墓地の土壁中出土。	永井2007	本證寺
別郷廃寺	平地寺院（古代～）	安城市	【軒平瓦】89:唐草文、大門遺跡(77)と同文、浄土寺(92～94)と同一意匠、折り曲げ技法、黄褐色。	安城市史編さん委員会2004	安城市歴史博物館
寺領廃寺	平地寺院（古代～）	安城市	【軒平瓦】90:連巴文、顎貼り付け技法？燻しなし。浄土真宗松韻寺本堂の調査で出土。	安城市史編さん委員会2004	安城市埋蔵文化財センター
百皿1・2号窯跡(百皿古窯)	窯	額田郡幸田町	【鬼瓦】戦前に出土	内田1986	幸田町郷土資料館
大草山廃寺（浄土寺）	山林寺院（中世～、天台宗）	額田郡幸田町	【軒平瓦】92:唐草文(文様A)、顎貼り付け技法。93:唐草文(文様B)、顎貼り付け技法。94:唐草文(文様C)、顎貼り付け技法だが顎形態は92より変化【平瓦】凸面に側縁平行の縄タタキ。焼成はいずれも硬質で灰色。	梶山1994・永井2007	浄土寺(92・93)徳川美術館(94)
円光寺境内遺跡	平地寺院（中世～）	安城市	【丸・平瓦】燻しなし、黄褐色。	-	安城市埋蔵文化財センター
堀内貝塚	貝塚・集落	安城市	【丸・平瓦】凸面縄タタキ、燻しなし、黄褐色。竪穴建物から伊勢型鍋・山茶碗と出土、13世紀。	安城市史編さん委員会2004	安城市埋蔵文化財センター
献上田廃寺	寺院？	西尾市	【平瓦】燻しなし、褐色。	遺跡地図・台帳	西尾市教育委員会
財賀寺旧境内	山林寺院（中世～、真言宗）	豊川市	【軒丸瓦】95:三巴文【丸瓦】凸面縄タタキ	95 :岩原ほか2006	豊川市教育委員会
八剣神社（広全寺）	寺院？	新城市	【軒丸瓦】103:三巴文、巴が密、硬質で赤褐色。104:三巴文、塩狭間古窯と同笵【軒平瓦】105:唐草文(小型)、瓦当に布目痕、折り曲げ技法。106:,107:唐草文、瓦当に布目痕、折り曲げ技法、塩狭間古窯と同笵。	岡戸1956・足助町教育委員会1983	新城市教育委員会※拓本・実測図の提供受ける
極楽寺跡	寺院（中世）	新城市	【軒丸瓦】96:三巴文、硬質、灰色【軒平瓦】97,99:連巴文、巴は1つごとに左右逆、燻しなく、硬質赤褐色。98:下向陰刻剣頭文、顎部形態から初期の折り曲げ技法？96,97は発掘調査で出土。	岡戸1956・新城市教育委員会2008	新城市教育委員会※拓本・実測図の提供受ける
石坐神社	寺院（式内社、神宮寺?）	新城市	【軒丸瓦】101:三巴文、八剣神社(104)・塩狭間古窯(53)と同笵【軒平瓦】102:連珠文、顎貼り付け技法、凹面糸切、甘い燻し。		新城市教育委員会
今水寺	山林寺院（中世～）	新城市	【丸瓦】100:詳細不明【平瓦】「大仏殿」「東」刻印が1点ずつ（採集年、地点注記あり）	柴田常恵拓本集、100:三河山寺研究会2010	新城市教育委員会(100)
橋良東郷古窯	窯	豊橋市	【平瓦】山茶碗兼業窯、渥美窯編年1a期(12世紀中葉)	豊橋市教育委員会2006	豊橋市教育委員会
高井遺跡	集落(弥生～古代)	豊橋市	【丸瓦】トレンチ調査で1点出土。	豊橋市教育委員会2010	豊橋市教育委員会
太陽寺跡	山林寺院	豊橋市	【丸・平瓦】凹面に「東」刻印あり。伊良湖東大寺瓦窯産。	111 :岩原2005	豊橋市教育委員会
正宗寺	山林寺院（中世～、臨済宗）	豊橋市	【軒平瓦】唐草文、未実見のため詳細不明。	110 :三河山寺研究会2010	不明
普門寺旧境内	山林寺院（中世～）	豊橋市	【軒丸瓦】112:三巴文、燻しなく褐色系。113:三巴文(平面的)、甘い燻し、軟質。114:三巴文、褐色系【軒平瓦】115,116:下向陰刻剣頭文、平瓦部縄タタキ後ナデ、離れ砂なし。117,118:連珠文、文様面・顎貼り付け技法、甘い燻し、タタキ不明。112～118は3次調査(元々堂跡)。119:唐草文、1次調査(元堂跡)。	112～118 :豊橋市教育委員会2012、119:豊橋市教育委員会2010	豊橋市教育委員会
古婦遺跡	集落？	田原市	中世瓦？（東大寺瓦窯付近）	遺跡地図・台帳（1993）	？
大草第1地点	集落？	田原市	中世瓦？（東大寺瓦窯付近）	愛知県教育委員会1967	
大草遺跡	集落？	田原市	中世瓦（東大寺瓦窯産）	愛知県教育委員会1967	田原市教育委員会
伊良湖東大寺瓦窯	窯	田原市	【軒丸瓦】122:銘文【軒平瓦】123,124:銘文、顎貼り付け技法【丸・平瓦】ともに凹面に「東」「大佛殿」の刻印(125,126)	122～126 :愛知県史編さん委員会2012	田原市教育委員会
神ノ釜1～3号窯（神ノ釜古窯）	窯	田原市	【軒平瓦】120:唐草文、緩い曲線顎、硬質、灰色。	120 :田原町史編集委員会1971	田原市教育委員会
坪沢12号窯跡	窯	田原市	【軒平瓦】121:下向陰刻剣頭文(比較的小型)、折り曲げ技法、硬質、灰色。	121 :田原町史編集委員会1971	田原市教育委員会
般若寺	寺院	田原市	【軒丸瓦】三巴文、【軒平瓦】連珠文、瓦当下端は弧状、中世後半？	柴田常恵拓本集	般若寺、個人

図 5　西三河地域の中世瓦拓本・実測図（断面トーンあるものが永井実測資料）

れるのが浄土寺の唐草文軒平瓦である。92・93は文様を異にするが顎部長はほぼ同じで、93・94は同笵ながら94の方がやや短い顎部となり、ここでも推移がみられる。なお当該資料は、軒平・平瓦のみが骨を納めた古瀬戸壺を囲うように立てられた状態で出土しており（小栗1937）、墓の構築材に転用されたと考えられる。古瀬戸壺は中期様式なので14世紀代となるが瓦の年代ではないのは言うまでもない。

尾張地域では窯跡のみで確認されている連巴文は西三河地域のジグウジ遺跡（86）、寺領廃寺（90）で出土しているが、いずれも顎部下幅の狭い顎貼り付け技法であり尾張産のそれらに比して明らかに後出的で系譜関係も見出しがたい。また本證寺出土の変形連珠文軒平瓦（88）は、短い顎部下幅ながら平瓦凸面から縦ナデを施す曲線部分が長く、西三河地域内に類例をみない。なお筆者は、本證寺を開いた僧慶円の活動時期を13世紀第3四半期に想定し瓦の時期をそこに求めている（永井2007）。

西三河地域での特徴は、軒平瓦の文様面・顎貼り付け技法がみられる点にある。その典型は滝山寺の連珠文軒平瓦（68）にみることができ、それに類する粘土接合面が看取されるものとして猿投神社境内（56）、古城遺跡（61）、矢作川河床遺跡（83）の各連珠文が挙げられる。56は顎部形状が不明だが、他はいずれも芦田B1'b類に相当する。68は滝山寺現本堂付近で軒丸瓦（67）とともに出土したという。14世紀初頭成立とみられる『滝山寺縁起』を参照すれば、現本堂地点（「西ノ峯」）における貞応元年（1222）の創建、さらに建長6年（1254）の屋根葺き替えという造営記事がある。現状ではこのいずれとも決めがたいが、13世紀第2四半期を中心とする時期は南都の年代とも齟齬がない。

ところで矢作川河床遺跡からは「□師寺」「東光坊良信」ほか人名などが凹凸面に刻書された平瓦（81）が連珠文軒平瓦（82）とともに採集されている。82は顎貼り付けもしくは文様面・顎貼り付け技法と推定され、13世紀中葉を中心とする。新行紀一氏は「□師寺」が矢作の薬師寺とみて、『滝山寺縁起』の同寺関連記載が建長4年（1252）、弘安2年（1279）であることから、13世紀半ばに瓦出土地点付近に薬師寺が存在したと推定している

東三河の中世瓦とその年代

東三河地域では折り曲げ技法の軒平瓦が極楽寺跡の連巴文（97・99）・下向陰刻剣頭文（98）、八剣神社の唐草文（105～107）と新城市域で集中し、渥美窯の坪沢古窯で剣頭文（121）が離れて存在する。96・97・99は燻しのない無釉で灰色～褐色である。極楽寺は年代史料がなく定点が求めにくいが、12世紀後葉まで確実にさかのぼり、若干の平瓦が出土している橋良東郷古窯（渥美窯Ⅰa期）を除くと、当該地域最古の中世瓦といえる。また八剣神社では、西三河の塩狭間古窯と同笵の唐草文軒平瓦（106・107）とその小型品（105）があり、特徴的な珠文の軒丸瓦（103・104）と組み合う。塩狭間古窯との先後関係は今後検討したいが、製作技法は同じでほぼ同時期と言ってよい。

一方普門寺では極楽寺跡と同じく剣頭文軒平瓦（115・116）が出土するが、折り曲げ技法ではなく笵で押し込みながら平瓦端部の厚さを増す製作技法をとっており、直接的な関係は薄いとみられる。寺伝では1170年前後に焼失した後に源頼朝によって再興されたといわれ、概ね12世紀末～13世紀初頭といえる。

そして渥美半島南端の伊良湖東大寺瓦窯で再建東大寺の瓦が生産される。その使用箇所は主に回廊で（奈良県教育委員会2000）、造営時期から当該瓦は13世紀初頭と推定されている。「東大寺大佛殿瓦」銘のある軒平瓦はいずれも顎貼り付け技法で変化はみられない。大きな顎部は東大寺向けという特殊仕様でもあるが、東三河地域内に先行する技術は見出しがたい。なお、東三河地域では同窯産瓦が太陽寺址の「東」刻印（111）や拓本で今水寺の「大佛殿」刻印があり、丸・平瓦については、東大寺限定ではなかったと思われる。この他伊良湖周辺でも同窯産とみられる瓦が出土しているが、これらは出荷に関わる場所であったと考えられる。

ところで顎貼り付け技法は石座神社の（102）にもあるが、当該資料も燻しが掛かり八剣神社の瓦とは異質である。伊良湖東大寺瓦窯から技

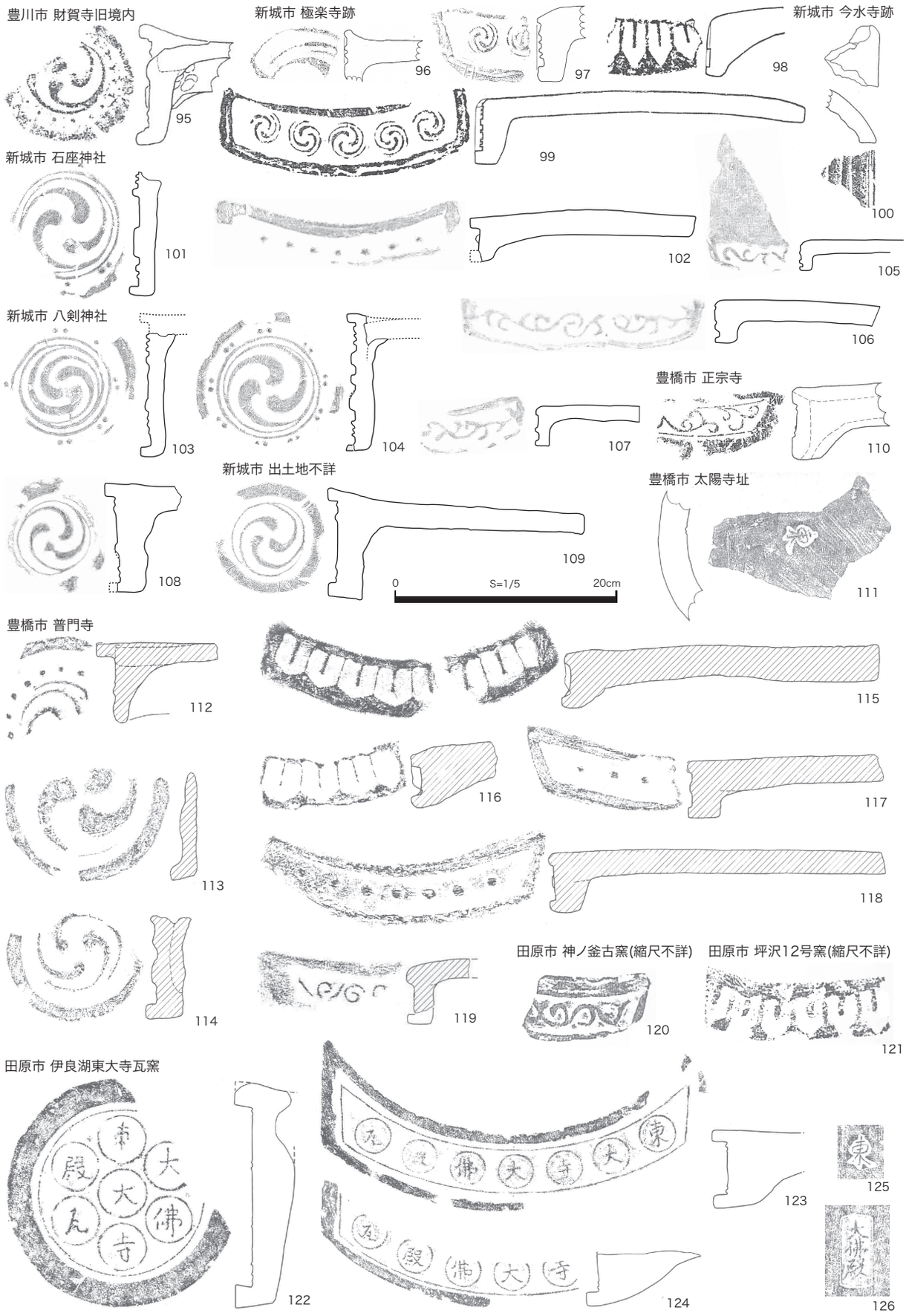

図６　東三河地域の中世瓦拓本・実測図（断面トーンあるものが永井実測資料）

術が伝わったものであろうか。そして普門寺でも同じ意匠の連珠文軒平瓦（117・118）が出土しているが、こちらは文様面・顎部貼り付け技法が相当すると考えられ、先の剣頭文と比べても 13 世紀中葉まで時期が下るであろう。これに基づくと軒丸瓦は 112 が 115・116 と、珠文のない 113 が 117・118 に組み合うと想定される。したがって普門寺では 13 世紀中葉以降に多数の瓦を使用する造営はなかったと推測され、次に登場するのが 119 のような近世に近い瓦となる。

尾張と三河の中世瓦展開と熱田大宮司家

以上、各地域ごとに中世瓦を概観してきたが、その展開過程を整理しておきたい。

尾張地域では 12 世紀代に京都向け生産を主体としつつ、一部は熱田の神宮寺など台地・丘陵地帯で限定的に使用され、熱田では 13 世紀前半代もそれが継続していた。12 世紀代の尾張産瓦については、柴垣氏の研究以来国司の差配が指摘されているが、梶原氏はその統制がとれていたのは比較的短期間であったとみている（梶原 2008）。先述の熱田や三河の大門遺跡の状況を参照すれば、ほぼ初期段階から在地での使用が始まっていたことは確実で、国衙の統制という評価も再検討が必要であろう。むしろこれは、鎌倉幕府を創始した源頼朝に関わりの深い熱田大宮司家の存在を考えておきたい。また大御堂寺のように直接頼朝が再興に関わったと想定される事例も合わせると、当該期尾張地域における瓦生産と使用は政治的な背景に基づいた大宮司家の差配によるものと推測される。したがって北条氏による執権政治へと体制が変わるにつれて、尾張地域での瓦使用頻度は下降していったのであろう。一方 13 世紀後半～ 14 世紀は、対称的に沖積平野部での使用が増加するが、下津のような政治拠点であることはやはり重視せねばならない。

そのような観点から西三河地域をみたとき、矢作川と東海道の交差点に近い大門遺跡の地理的位置は重要である。当該遺跡は尾張方からみて額田郡の入り口に相当する。現在は八剣神社のみとなっているが、同社蔵の永仁 4 年（1296）懸仏から「大門寺」の所在が知られ、南方には旧字「勝蓮寺」があったという（新行・小林 1989）。このことから寺院の集まる中世都市的景観を想起するが、そこに 12 世紀中葉の尾張産と大差ない瓦が創建期に用いられているのである。小林吉光氏によれば、熱田大宮司家では、先に額田郡域の開発に着手した藤原季兼と尾張氏を両親にもつ季範（1090-1155）が、大宮司職とともに尾張氏のもっていた各権益も継承したとされる。その中に瓦の調達も含まれていたとすれば、季範や子の範忠によって「大門寺」などが創建されたと考えることができる。これらの権益は大宮司家で相伝されたとみられるが、季範が男子 2 人を滝山寺に入れていることからすると、額田郡域の山林寺院が権益の舞台になっていたと推測される。

そこで西三河地域の中世瓦分布をみると、(1) 神宮寺（ジグウジ遺跡＝知立神社・猿投神社）と (2) 天台宗山林寺院（滝山寺・高隆寺・浄土寺）が基軸になっていることに注意される。(1) は三河二宮・三宮であり、拓本資料で知られる尾張一宮（真清田神社）・二宮（大縣神社）の瓦も合わせると、三河一宮（砥鹿神社）での瓦出土は知られていないものの、12 ～ 13 世紀代の尾張・三河国内の主要神宮寺で瓦葺き建物が独占的に造営されていた様相がみえてくる。一

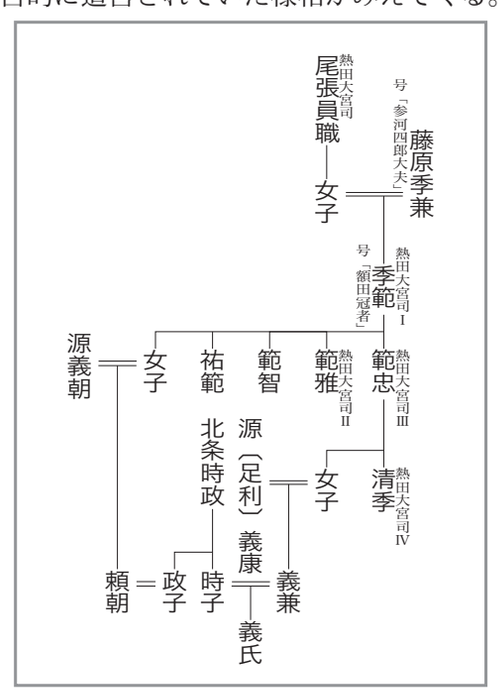

図 7　熱田大宮司家略系図

方 (2) は滝山寺・高隆寺が連珠文で、浄土寺が唐草文で、それぞれ大門遺跡の軒平瓦を同文関係の基点にしている。おそらくこれは熱田大宮司家の信仰と意志を表していると考えられる。

その後、三河における熱田大宮司家の遺産は女系を通じて足利義兼・義氏に伝えられ、足利氏も滝山寺・真福寺・高隆寺に対して大小の造営を行っている。特に 13 世紀中葉の連珠文軒平瓦は承久の乱後三河守護となった義氏の時代に相当しており、天台宗寺院だけでなく知立神社・猿投神社でもみられることから、神宮寺の造営にも積極的であったと考えられる。このような施策のあり方は三河における熱田大宮司家の継承者であることを如実に表したものといえ

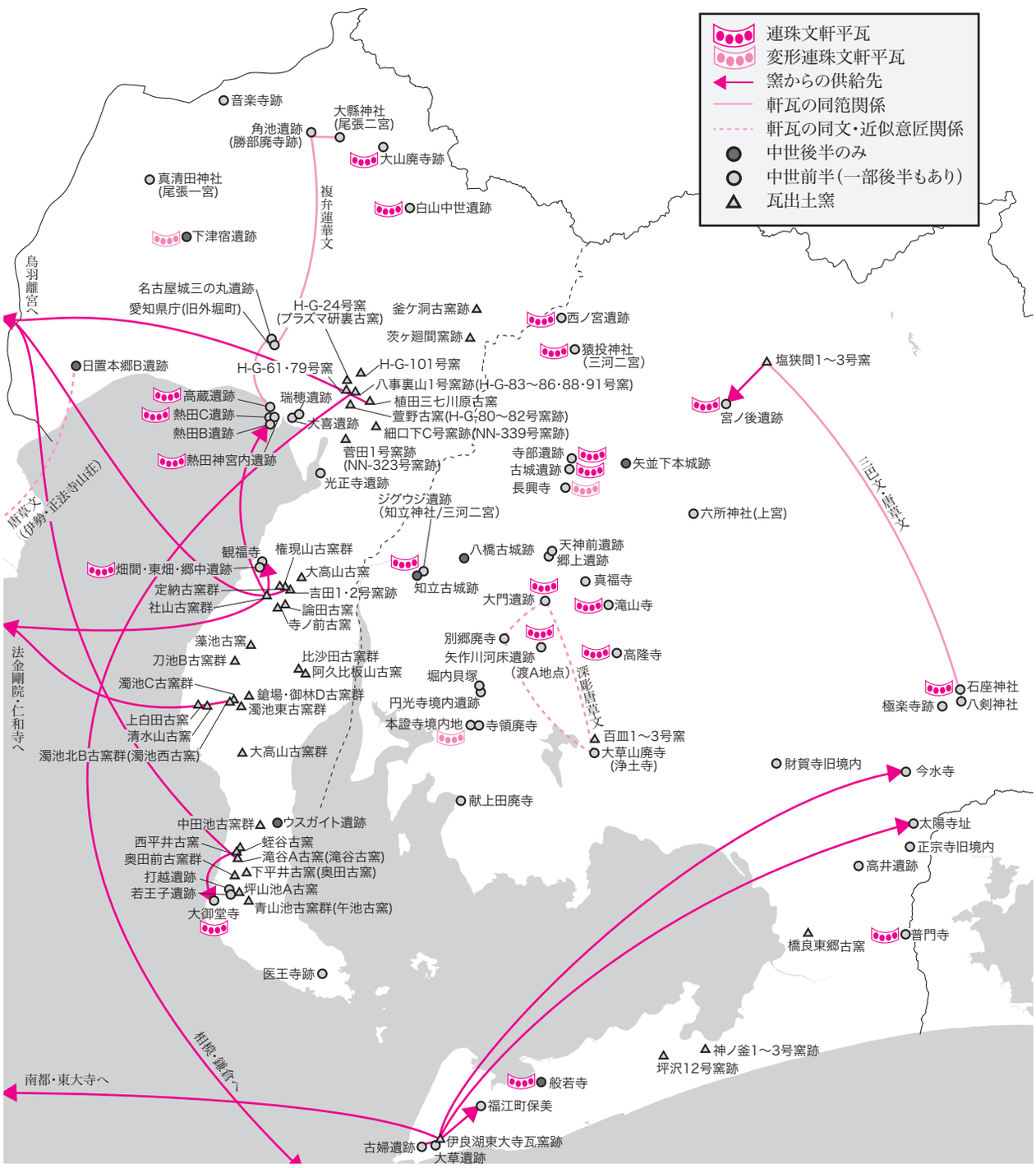

図 8　愛知県（尾張・三河地域）の中世瓦出土地点

よう。ただしその造瓦技法は南都に対応して刻々と変化していることから、その都度職人が地域外から招聘されたものと考えられる。

ところが、弘安８年（1285）の霜月騒動を契機に、安達泰盛に近かった足利氏は三河において衰退せざるを得なくなる（福島 2007）。この政治的状況は、三河において 13 世紀後葉以降の軒平瓦が激減する現象に表れていると考えられ、普門寺や石座神社でもその影響があった可能性が高い。これに対して、西三河地域では浄土真宗の本證寺（13 世紀後半）や臨済宗の長興寺（14 世紀前半）では従前と異質な瓦がみられ始め、壇越など背景の違いを示している。それは尾張地域と同様、域内で広がることはなく、中世後半の新たな政治的・宗教的拠点で限定的に使用されたのである。

（謝辞）　過去 10 年間の資料調査では各機関・個人のご協力とご教示をいただいた。記して謝意を表したい（敬称略）。
愛知県史編さん室、荒木集成館、安城市歴史博物館、岡崎市美術博物館、亀山市教育委員会、幸田町教育委員会、小牧市教育委員会、新城市教育委員会、高浜市やきものの里かわら美術館、知立市歴史民俗資料館、東海市教育委員会、豊田市教育委員会、豊田市史編さん室、豊橋市文化財センター、名古屋市博物館、名古屋市見晴台考古資料館、瑠璃山浄土寺、荒木正直、天野信治、安藤さおり、市本芳三、伊藤久美子、岩山欣司、大澤伸啓、岡村弘子、長田友也、小野友記子、小山正文、筧和也、梶山勝、梶原義実、金子智、蟹江吉弘、神取龍生、纐纈茂、近藤真規、三田敦司、鈴木昭彦、坪井裕司、永井伸明、藤岡直子、宮澤浩司、村上昇、森泰通、安井充、
また、平成 25 年度奈良文化財研究所専門研修古代・中近世瓦調査課程において、各講師や研修生から多数ご教示いただいている。これに参加できたことも合わせて感謝したい。

（文献一覧）

愛知県教育委員会　1967 『豊川用水路関係埋蔵文化財調査報告』
愛知県教育委員会　1967 『渥美半島関係埋蔵文化財調査報告』
愛知県史編さん委員会　2010 『愛知県史 資料編考古 4 飛鳥～平安』愛知県
愛知県史編さん委員会　2012 『愛知県史 別編 窯業 3 中近世 常滑』愛知県
愛知県埋蔵文化財センター　2001 『天神前遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 96 集
愛知県埋蔵文化財センター　2002 『郷上遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 98 集
愛知県埋蔵文化財センター 2003 『東端城跡 御船城跡 矢並下本城跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 113 集
愛知県埋蔵文化財センター　2005 『名古屋城三の丸遺跡（Ⅶ）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 127 集
愛知県埋蔵文化財センター　2012 『日置本郷 B 遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 177 集
愛知県埋蔵文化財センター　2013 『下津宿遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 175 集
芦田淳一　2001 「興福寺の中世軒平瓦」『帝塚山大学考古学研究所研究報告』Ⅲ
芦田淳一　2002 「鎌倉時代の東大寺軒平瓦」『帝塚山大学考古学研究所研究報告』Ⅳ
足助町教育委員会　1983 『塩狭間古窯』
荒木集成館　1987 『高蔵遺跡五本松町 11 第 2,3 次発掘調査報告書』
荒木集成館　1991 『高蔵遺跡五本松町 11 第 4,5,6,7 次発掘調査報告書』
安城市史編さん委員会　2004 『新編 安城市史 10 資料編 考古』安城市
岩原剛　2005 「白星山太陽寺について - 採集資料からみた東三河の山林寺院 -」『研究紀要』14　豊橋市美術博物館
岩原剛・野澤則幸・中島啓太 2009 「財賀寺旧境内の調査」『三河考古』第 20 号　三河考古学談話会
上原真人　1978 「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14　財団法人元興寺文化財研究所
内田智久　1986 「幸田窯」『マージナル』No.6　愛知考古学談話会
岡崎市編集委員会　1989 『新編岡崎市史 16 史料考古 (下)』岡崎市
岡戸栄吉　1956 『横須賀町史別冊 横須賀の遺跡』愛知県知多郡横須賀町
小栗鐵次郎　1937 「幸田村大字大草山寺の遺蹟・遺物」『愛知県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第 15
梶山勝　1989 「熱田神宮出土の半截花文軒平瓦」『名古屋市博物館だより』69　名古屋市博物館
梶山勝　1994 「徳川美術館所蔵の古瓦」『金鯱叢書』第 21 輯
梶原義実　2008 「東海地方における瓦生産」『日本考古学協会 2008 年度愛知大会研究発表資料集』同実行委員会
春日井市教育委員会　1971 『春日井市発掘調査報告書 第 5 集』
株式会社イビソク　2009 『熱田神宮内遺跡』・『熱田神宮内遺跡Ⅱ』
株式会社二友組　2013 『熱田 C 遺跡発掘調査報告書』
北村和宏・永井邦仁　2014 「中世禅宗寺院としての長興寺境内に関する覚書」『豊田市史研究』第 6 号　豊田市
小牧市教育委員会　1979 『大山廃寺跡発掘調査報告書』
佐川正敏　1995 「鎌倉時代の軒平瓦の編年研究」『文化財論叢』Ⅱ同朋舎
柴垣勇夫　2003 『東海地域における古代中世窯業生産史の研究』真陽社
白菊古文化研究所　1965 『権現山古窯址』
新行紀一・小林吉光　1989 「第 1 章 京都と鎌倉のあいだ」『新編 岡崎市史 2 中世』岡崎市
新城市教育委員会　1997 『今水寺跡発掘調査報告書』
新城市教育委員会　2008 『極楽寺跡発掘調査報告書』
杉浦正明　1999 「瀧山寺出土瓦について」『郷土舘』166　岡崎市郷土館
田原市史編さん委員会　1971 『田原町史 上巻』田原市
知立市教育委員会　2012 『八橋古城跡Ⅱ』知立市埋蔵文化財発掘調査報告書
東海市教育委員会　2012 『畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告書』
東海市教育委員会　2013 『畑間・東畑・雲龍院跡発掘調査報告書』
豊田市教育委員会　2004 『寺部遺跡Ⅳ』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 61 集
豊橋市教育委員会　2010 『市内遺跡発掘調査 - 平成 19 年度 -』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 109 集
豊橋市教育委員会　2012 『市内遺跡発掘調査 - 平成 21 年度 -』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 119 集
永井邦仁　2007 「本證寺土塁出土の中世瓦」『安城市史研究』第 8 号
名古屋市教育委員会　1989 『熱田神宮内遺跡発掘調査報告書』
名古屋市教育委員会　1989 『瑞穂区大喜新町 大喜遺跡』
名古屋市教育委員会　2006 『熱田 B 遺跡発掘調査報告書』
名古屋市博物館　1992 『尾張地域の考古資料に関する文献資料調査 (Ⅱ)『瓦礫舎』』名古屋市博物館調査研究報告Ⅱ
奈良県教育委員会　2000 『東大寺防災施設工事・発掘調査報告書』東大寺
半田市立博物館　1993 『知多の古瓦』
福島金治　2007 『安達泰盛と鎌倉幕府 – 霜月騒動とその周辺 -』有隣新書
三河山寺研究会　2010 『三河山寺研究会ミニシンポ 1 三遠の山寺』
美浜町誌編さん委員会　1985 『美浜町誌 資料編二』美浜町役場
森達也　『光正寺遺跡』
山崎信二　2000 『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第 59 冊